

矢来篝

「——怒ったあいつの恐ろしさつたらないね。思い起こすだけで身が縮む。ま、それにしたつてあいつと付き合えて俺は幸せなんだが。なんだつて——」

「ごうごうと冷たい風の吹く夜である。ある男は女への愛を熱く語っていた。その隣を歩く人間は素知らぬ顔で河川敷に話しかける。

「やっぱりイヌつてイヤです。つくづくご主人様のことしか見えていないですもん」

水面に揺らぐ月を人間は見ている。空を見上げたならば、きつと美しい満月があるだろうと一人ごちた。男は尚も愛を語る。

「もちろん、俺はイヌだ。そこで、イヌはイヌでもお姫様をお守りする番犬さ。なかなか仕え甲斐はあるぞ」

男は首を傾けて人間をじつと見た。月光が反射しているためか橙色の髪は一層鮮やかであった。人間は蹴った石ころを眺めながら男に詰問する。

「なるほど。あの人がお姫様で、先輩は番犬ですか。だとしたら、あたしはいつたい何になるのです？」

男は足を止めた。人間は男を睨んでいた。男は河川敷上のレールを見やった。まだ電車は走つてこなかった。

男は頭を掻いて、答える。

「別になんとも思つてないさ」

口早であった。

「これでいいだろ。そんなことよりもお前、急がないと終電に遅れるぞ。俺は歩いて帰るから関係ないけど」

男は唇を舐めて再び歩き出した。振り返ることはなかった。それからしばらくすると、そこにいた誰かは道を引き返していた。終電の時刻はとうに過ぎていた。誰かは、職場が開門時刻になるまで、門の前で立ち尽くしていた。

「——あら、休日に珍しい人もいたものね。眼を腫らしていることといい、昨日に何かあったのかしら。貴女さえよければ相談に乗るけれど？」

太陽の光がかすかに地上を照らす曇天のなか、ある女は門に寄り掛かる誰かに話しかけた。誰かは顔を上げて女を寝惚け眼で視認する。

「ああ、そっか、うん、ああ、でも、うん、そういう、ああ、まあ、なら、うん、もういいや」

誰かは、そう、うわ言のように呟いて、膝から崩れ落ちた。女はこれを受け止めると。そのまま放置しておくのは好ましくなかったので救援を呼んだ。

「もしもし。わたしだけれど、今すぐに職場の門まで来てくれないかしら。ええ、今すぐに」

電話の相手は二日酔いにでも罹つたのか、ひどく声が枯れていた。喉が強い彼にしては珍しかった。女の腕が悲鳴を上げないうちに彼は来た。

「ごめん、遅くなった。ひとまずその誰かは俺が持つよ。これは救急車を呼ぶべきだよな、憔悴している」

男はそう言つて誰かの脈を測つた。危険値には達していなかった。ほうと男は息を吐き女を見る。女は腕を組んで何かを考え込んでいるようだった。

「いいえ、止めておきましょう」

眉間の皺をほぐしながら女は答えた。

「これはおそらく、わたしが解決すべきものよ。その証拠に、これを見てほしいのだけれど」

女は誰かの持ち物であろう鞆から焦げ茶色の長財布を取り出した。シルクハットを被つた男性がパイプ式煙草を吸っているという刺繍がそれにはされていた。そして、そのなかには紙幣やポイントカードの他に男の名刺もあった。

「うちの社員しか持たないはずの財布に、俺の名刺か。おかしいな。少なくとも俺の記憶にはこの誰かの印象はない。んで、その様子だと君もなんだろう？」

男は肘を組み顎髭を撫でた。この会社は少数精鋭主義で社員の人数は常に二十ほどに保たれている。それで忘れるなんてことがありえるだろうか。

「悔しいことにね。この人、間違いないわ。わたしたちの後輩のはずなのに」

女はそう言うと、鞆から今度は『社員名簿』と表紙に記された本を取り出して数ページ捲り、誰かの顔写真と入社年を指さした。

「俺らの一個下か……だめだ、まったく覚えてない。初めての後輩なら殊更にかわいがるはずなんだがなあ」

男は誰かそのものと名簿と見比べて唸るも、やがて見当付かずとばかりに手を上げた。女は頷き、これは最近耳にした話のだけれどと前置きして言う。

「シツボウショウっていう病が原因かもしれないわ。これ、貴方も聞いたことくらいはあるかしら？」

シツボウショウ。何度か、男はその言葉を咀嚼してみた。シツボウショウ。失望シヨウ。失望病。失望病。望みを失うことで発症する病だろうと推測する。

「聞いたことはないが、まあ、だいたい分かった」  
すると女はため息を吐いて答える。

「どうかしらね。失うに希望まででは行きつくとしても、失って忘却の方までは分らないと見たわ。ほら凶星」

そこまで言うと女は男の唇に人差し指を当てた。女は笑みを浮かべている。そしてその湿っていた唇から指を離すと、すかさず首を掴んだ。男は息苦しうに喘ぐばかりであった。その後男が白目を剥きかけると女は首から手を離れた。

「……ケホッ、ゲホッ——つ、突然首を絞めるのは、やめてくれ。冗談抜きで命にかかわる。俺がきみに何か悪いことをしたか？」

女が用意したポケットティッシュで口周りの液体を拭きながら男は問うた。酸欠のためか顔は若干青褪めていた。女は眼を細め、また、手で口を覆う。

「締めなさいって啓示が来たのよ。きつと女の勘の一種ね……ひよつとして貴方、昨晩は浮気していた？」

そう言うと女は路上に寝かせた誰かを見やる。誰かは小麦色の肌で背が低い、女とは真逆の容姿だ。自らにない要素を持つ誰かを警戒するのは無理もなかった。

「いやいやいやありえない。信じてくれ。俺がどこぞの有象無象を好きになるとでも？」

男はブンブンと首を勢いよく横に振って女の言を否定したが、女は、男の反論を聞き届けた後に再度男を細目で見つめたため、男は早口で釈明を続ける。

「勘弁してくれ。残念なことに昨晩の記憶はないがその誰かに浮気はありえないとは断言できる。神に誓って」

そう男が女を見つめ返すと、しばらく場には電車が走る音のみが流れた。電車が走り去って辺りに静寂が訪れると、女は口を開き舌鋒を飛ばした。

「まず、貴方は無神論者よね」  
人差し指を立てる。

「次に、嘘をついたり焦ったりしたときは早口になるわよね。あと、行動が悉くオーバーになったり——」

中指、薬指、小指と女は次々に指を立てていく。片手で足りなくなると立てた指を一つ一つ降ろしていつその度に男の心理を洗いざらい罪状のように暴く。その口調は淡々としていて、怒りや嘆きといった激情はおろか感情すら存在しない無機質な印象を男に抱かせた。

「——ざつとこんなものかしら。目の動きから脚の向きまで、あらゆる動作を観察すればヒトの心なんて丸裸よ。特に貴方は」

そこまで述べると女は、能面のような表情を緩ませてにんまりと笑った。意気消沈としていた男は眼を見開いて後ろを振り返る。

「シツボウショウの患者は意識だけある植物人間のような状態になるって聞いたけれど、本当だったようね」

背後で女が話していたが、男は安心して聞き取れなかった。ただ口を大きく開けて顎を外しかけることしかできなかった。

「今朝ぶりですね、お姫様。そして昨晩ぶりですね、先輩。この度はお騒がせして申し訳ありませんでした」

人間はそう言ってペこりとお辞儀した。男は顎も直さずにそれに倣う。女は二人のその様子を写真に写してからバシンと手を叩いた。

「そこで変な空間を作っているお二人さん。話を進めてもよいかしら？」

女がそう言うと、人間と男は揃って頭を上げ彼女へ向き直った。男は女を直視できずにいたが、人間は女から視線を外さなかった。

「ふうん」  
人間の眼に女は焦点を合わせた。

「謝罪は受け付けられないわよ。昨晩の沙汰を聞かないことには、ね。もちろん積もる話もそれからってことで」

そう言うってから、女は、日差しが暑いわねとポケットから赤いハンカチを取り出し額の汗を拭く。これを視界の隅で見っていた男の表情は硬くなる。男の呼吸が浅くなるのを側で感じつつも、人間は、深呼吸を一回挟んだ後に昨晩のありのままを語った。

「なるほどね。つまり、どこの男があらぬ暴言を吐いたのがコトの発端つてわけ。一応訊くけれど彼女の語りに反論ないし訂正はあるかしら？」

人間が語り終えると女は数瞬だけ目を瞑り、そして思考の整理がついたのか目を見開くと人間から男へ視線を移した。

「いや、特にない。昨晚の件については俺が全面的に悪かった。本当にすまないことをしたと思う。謝るよ」

男はそう言うと、二人に向かう形になるように三歩ほど後ろに引きさがり頭を垂れた。これに対してまず発言したのは女だった。

「わたしは良いわよ。肉体的にも精神的にも追い詰めることができて楽しかったですしね」

語尾の音圧が心なしか強いと男は感じたが、何も言わなかった。沈黙が訪れる。その後、太陽が雲に隠れると人間も言葉を出した。

「あたしも、大丈夫です。結果的に良いものを得られそうですね……ところで一つ、質問があります」

人間の足は女へと向いた。女は眼を細めて人間を眺めていた。男は頭を下げたままだった。人間は赤いハンカチを見やりながら口を開いた。

「偶然、だと信じたいですが」

拳は握られていた。

「病に陥ったのは、山寺先輩に心無い言葉を投げられた後ではなく楓花先輩と会った直後だったんです」

それはなぜですかと蚊が鳴くような声で人間は問う。

女——楓花は、これを聞き届けると、赤いハンカチをポケットではなく鞆にしまって河川敷を眺めた。水面には雲も太陽もなかった。ただ数多の魚が上流に向かって、ひたすらに泳いでいる姿だけがあった。

「潜伏期間、かしらね。事例が少ないから断定できないけれど。まあでも、いずれ自信を持って答えられるようにするわ。わたし、これでも探偵なのよ」

楓花はカバンから財布を取り出すと人間の所まで行って手渡した。これは人間の鞆から持ち出したものであった。

「ま、今日は休業日だから、あまり働く気はないのだけれど。ということでもわたしは帰るわ。またいつか」

それだけ言い残すと楓花は立ち去っていった。人間は訝しげに彼女を目で追っていた。そして視界から見えないとなると男——山寺に尋ねた。

「探偵、ですか。おそらく咄嗟についた嘘ですよ。あと、先輩にずっとそうされていると恐縮なので……」

人間は顔を上げるよう山寺に促した。申し訳なかったと断つてから山寺はその通りにする。そして人間に答えた。

「どうだろうな。わからん。ただ、あいつは悪いやつじゃない。彼氏の俺が保証する」

ま、本当だったら何年も付き添っている俺にそんな危険事を隠していたことになるから、できれば嘘であってほしいなと山寺は苦笑した。

「そう、ですよ」

人間も笑っていた。

「でも、あれ、あれ。あたしたち、どんな話をしていましたっけ。先輩、知っていませんか？」

微かに煙った空を二人で見上げる。

ウグイスの鳴く声が二人しかいない路に響く。

イチョウ並木が黄色い楽園を作る。

そういえばと人間は男を呼び止めた。

「電車、数か月前から来ません」

・あとがき

ちよつと言いつつ、時間に追われて書いたからやばいです。でも研鑽が足りないなと思う面も大きくあったりします。あと形式を縛ったのも良くなかったかな。それで表現の幅が狭まったかもしれない。うん。言い訳ですけれども。

もしかしたら、かなり読みにくい作品になってるかもなあと思ったりもしてます。最初は登場人物七人でド修羅場群像劇を書こうとしてたんです。でも書いてる途中に「あ、無理だわ」ってなって。この文量の三倍以上つてやばいじゃないですか。没ですね。それで次は怪奇ものに転換しようってなって。でも、これも書き途中で没になって。二倍は必要。はい厳しいですね。それで三度目の正直とライトな推理もの書こうとしたんですね。今度こそと。あと締め切りまで一時間しかないしと。やるしかねえと書いたんです。結果、没。推理ものに転換するには書きすぎた。そして、時、すでに遅し。止むをえずすべての要素を突っ込んだものを書ききることにしました。モザイク小説ですね。んで書ききったのを読んだら出来の酷いこと酷いこと。プロットを迷走させてはいけないと学びました。いや、ほんつと酷かったんですって。上のでもマシになったやつですよ。推敲で大事。おかげで読めるものに……仕上がったかなあ。仕上がったといういいなあ。まあでも、書いてて楽しくはあったので最低限の基準、自己満足はできました。当初はルーレットで決めたジャンルで書こうと思ってやっただけですがすぐ折れましたもの。魔王もの。

現在時刻、三時二〇分。編集の方、期限ぶつちして申し訳ありません。数十分どころではない遅延となりまして、次回から気を付けます。まる。